

会 誌

第 56 号

1. 古道を探る ～吹田街道の地理的考察～
.....岡 積 義 雄 1

2. アイヌ観光を題材とした授業実践と効果
ー高等教育機関基礎科目の授業を事例としてー
.....菊 地 達 夫 9

3. 「地理総合」に向けての授業例～半日観光ガイドプラン
.....大 久 保 雅 弘 16

4. 新札幌地名考(2)
.....山 内 正 明 23

2023年5月

札幌地理サークル

1 テーマ設定の背景

講義の際、地理的な視点で地域を見る事例として「東京」と「大阪」を取り上げている。ⁱ「東京」では、JR山手線に乗って車窓の景観を観察するという設定とし、高低差に気づかせるために地理院地図で路線をたどって断面図を作成すると、高架になったり、地下を走ったりと変化していることがわかる。このことを、関東平野の成立過程で海水面の変動による河川の下刻作用が働いていることを説明している。また、「大阪」では、大阪平野が成立する過程で海水面の変動が影響していることを説明する。大阪城が建っている場所は上町台地の北側である。上町台地は大阪城付近が最も標高が高く（38m）、その先は淀川に落ち込み、南へはなだらかに下っていて天王寺の辺りでは標高16mになっている。飛鳥時代の645年には孝徳天皇が難波宮を築いて遷都しており、その後の奈良時代（744年）にも聖武天皇が難波宮を再建し、1年間だけの遷都が行われた場所である。戦国時代には、石山本願寺が築かれたが、長期間の争いの末、織田信長によって焼き払われている。信長側の水軍が海から石山本願寺を攻めた続けた様子も歴史小説に描かれることもあり、そこは海に面した海食崖に立地しているような想像がされた。その後、跡地に豊臣秀吉によって大坂城が築かれ、大坂の陣で徳川家康によって破壊され、のちに徳川家が改めて新たに大坂城を築いている。

縄文海進時代には大阪の大部分が海または湿地だったことを考えると、都市化された現代にもその時代の影響があるのではないかと、それが今の市街地の発展にも影響を与えているのではないかと考え、地形図やGISの分析と現地でのフィールドワークにより考察してみた。

2 街道と古道について（位置関係）

研究対象地域を「大阪府吹田市江坂町」とし、研究分析する対象年代を「縄文海進～古墳時代」および「江戸幕府以降」とする。その理由は、縄文海進の頃は上町台地が大きな湾となった部分に突き出ており、淀川や旧大和川が上町台地で区切られた湾に土砂を堆積していたと思われる、突き出した上町台地の先にある天満砂州の部分が、現在の吹田市江坂町付近に届いていたことが推測されることから、街道や建物の立地が現在の町づくりにどのように現れているのかを現地で考えてみたいと思ったためである。

このことは新旧の地図を重ね合わせてみることで判明する。（図1）当時は海に接していた岸の部分は、波に削られた海食崖となっていたものと思われる。当時の吹田街道は海の底であったが、海面が下がることで河川の堆積作用で土地が広がり、交通・輸送のための道路ができ、特に人々が移動して物品のやりとりが増えてきたのは、戦国時代が終わり、安定が訪れた江戸時代になってきたからだと考えられる。江戸幕府が開



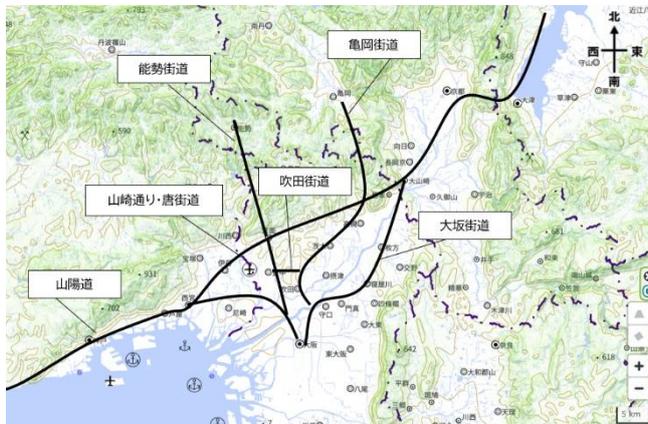
（図1）¹

¹ 地域共創学群教授、北星学園大学・北海商科大学・北海道医療大学非常勤講師

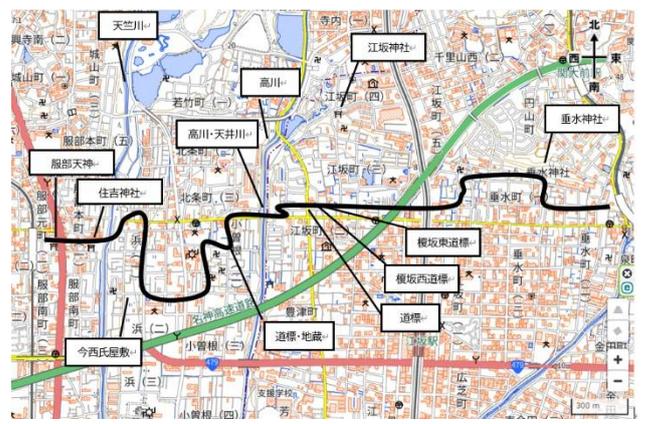
かれると、江戸を中心に街道が整備され、東海道・中山道・日光街道・奥州街道・甲州街道の五街道は道中奉行の管轄下におかれ天下の大道となった。江戸中心の社会体制になったことで、古代に九州太宰府と京を結んだ「大路」の山陽道でさえ脇街道に格下げとなった。かつて律令制で国を治めていた頃の山陽道は、先進国であった中国や朝鮮からの使節や技術者の一行が通う大路として重要であった。山陽道は脇街道となったものの東海道の延長路として沿道の各藩による整備が行われたため、そのころの道標や常夜灯などが現在も多く残っている。

山陽道の起点は西宮で、西宮と京を結び、京から東海道へつなげるために、唐街道・山崎通りが使われた。この通りは西宮で山陽道につながるため淀川の左岸を通っており、反対側の右岸で京と大坂を結ぶ街道を大坂側からは京街道、京側からは大坂街道と呼び、東海道の延長路と考えられている。¹¹今回、調査対象の吹田街道は山崎通りにつながる能勢街道と亀岡街道をつなぐ古道である。

(図2、3) 吹田街道は標高4~5m付近に位置し、街道に沿った高台に社寺が並んでいる。



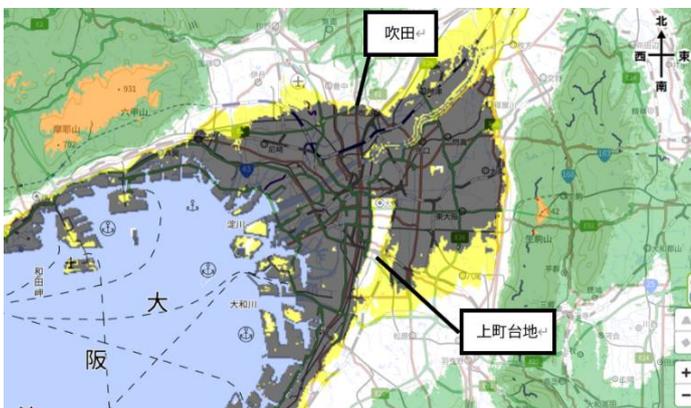
(図2) 大坂周辺の街道図 (地理院地図に加筆)



(図3) 吹田街道部分拡大図 (地理院地図に加筆)

3 縄文海進時代の吹田街道

地球は10万年ごとに氷期と間氷期が繰り返し発生していて、最も近い時期の氷期を「最終氷期」と呼び、今から7万年前から2万年前頃まで続いていた。氷期には氷床が発達して海水面が低下し、間宮海峡が凍り、宗谷海峡が干上がって陸続きとなり、マンモスやヒグマが北海道に生息した。最終氷期が終了して、温暖な時代が来ると氷床は縮小して海水面は上昇した。日本各地では貝塚の分布から、6000年前頃までの海面上昇を「縄文海進」と呼び、海水面は今より5mほど高かった。縄文海進の大阪付近の海岸線として、地形図の標高5m以下を濃色で表現して見た。(図4、5)



(図4) 現在の5m以下を濃く彩色 (地理院地図作図)



(図5) 吹田街道の5m以下を彩色 (地理院地図作図)

図4と前述の図1と比べてみると、ほぼ同一である。この地域で古くから歴史の舞台となっている上町台地が、半島のように古大阪湾へ突き出ており、海流によって天満砂州ができ、河内湖を外海と遮っていき、上町台地の東側は淀川や旧大和川が土砂を堆積し、西側は海の波の作用で砂丘が堆積して埋立て、淀川が天満砂州を横切り、現大阪湾へ流れ出したことで三角州を形成し、現在の低地帯ができていったことがわかる。

4 垂水神社と江坂神社

現地を訪れ、吹田街道を実際に歩いてみた。「垂水神社」と「江坂神社」は、吹田街道に沿って、参道が直交し、本殿へは急な階段を上っていく場所に立地していた。(写真1、2、3)



(写真1: 垂水神社) 本殿との段差あり



(写真2: 垂水神社) 本殿の台地より



(写真3: 江坂神社) 本殿との段差

本殿がたつ場所は、縄文海進時代でも陸だったところで、特に垂水神社は上町台地からの延長線上に位置することから神聖な地点であったのではないかと推測される。垂水神社の本殿への段差に海食崖が見られ、新生代第四紀更新世が始まる259万年前から現在にいたる地質の変遷を示す「第四紀地図」と考古学の発掘記録、それに現代の市街図を組み合わせ、土地のもつ「本当の姿」を探っていく研究も行われている。ⁱⁱⁱ

台地上の垂水神社の境内にある神社の由緒が書かれている石碑(写真4)を確認した。そこには次のような対岸の上町台地との関係が伺える記述があった。

「孝徳天皇の御宇天下早魘しし河井涸絶せるに際し豊城入彦命の敷世の御孫阿利眞公高樋をつくりて垂水基岡の水を長柄豊崎宮に通じ御膳に供すれば天皇その功を賞し垂水公の姓を賜いて本社を掌らしめ給えり」(原文通)

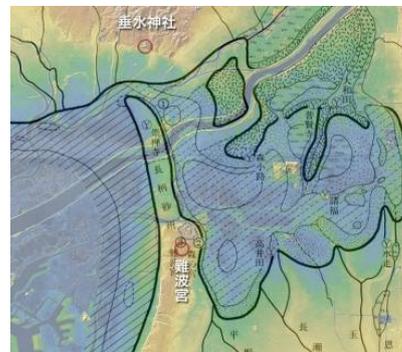
孝徳天皇(在位645~654年)の時代に干ばつに苦しむ難波長柄豊崎宮(なにわながらとよさきのみや=難波宮)に、この地の領主である阿利眞公(ありまのきみ)が懸け樋をつくってこの地の水を送り、その功績によって垂水公の姓を賜り垂水神社を創始したことが記されていて、それ以来この地を垂水とよぶようになったと言われている。難波宮があった上町台地が河内湾へ突き出て、天満砂州として延びていく先に垂水の瀧(写真5)があり、ここから水を引いたことが想像できる。この垂水の地は宮廷と密接な関係があったと考えられる。(図6^{iv})



(写真4) 垂水神社の由緒が書かれる



(写真5) 垂水神社にある垂水の水



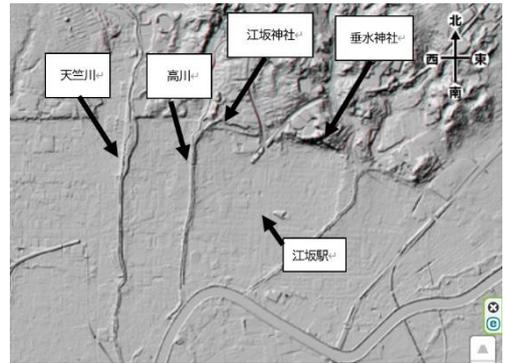
(図6)

5 丘陵から自然堤防帯へ

縄文海進で海水面は数m上昇して、かつての低地には海水が入り込み、河口部が内湾化して、上流から運搬された土砂が堆積していき、低地が形成されていった。北部の台地や山地から流れてきた河川が河口部に三角州を形成し、自然堤防や後背湿地が生まれていった。地理院地図のアナグリフ

(図7)では、高川と天竺川が自然堤防を形成して淀川へ流れる様子が見える。現在でも「高川」が豊中・小曾根から江坂へつながる付近では天井川となっている。(写真6)

上町台地の周辺も湿地から次第に乾燥していく。現在、大坂キタの大繁華街である「梅田」も最初は「埋田」であったことから湿地だった様子がうかがえる。江坂神社や垂水神社から下がった低地部分は明治のころの地形図を見ると水田が広がっておりいまだにその形跡がところどころに見られている。(写真7)



(図7) 地理院地図アナグリフ(グレー)



(写真6) 高架の上を高川が流れる。



(写真7) 今でも見られる湿地

6 吹田街道の地形的背景

前述したように、社会が平和で安定してくると、経済や文化が発展する。特に江戸時代となってそれまでの戦国時代が終わると様々な物資や作物が流通するようになる。そのため、輸送のための道路の整備と安全性が求められるようになった。合わせて、社会を安定させ、再び農民や商人を戦禍に巻き込まないように将軍家へ忠誠を示すための参勤交代が行われるようになった。このことも大坂の整備に大きな影響を与えた。

また、庶民の娯楽や信仰が盛んに行われるようになると、霊験あらたかな神仏を参拝する風習も生まれてきた。

江戸時代前後から現代にわたって街道がどのような役割をもち、発展してきたかを現地でのフィールドワークを通して考えてみた。



(図7) 大阪周辺の地質図(市原 1993) v

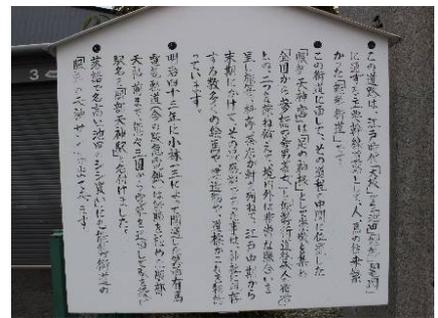
吹田市は大阪平野の北に位置し、低地部分から千里丘陵までの地域である。千里付近では6世紀頃に生産された須恵器が発掘され、吉志部・七尾では瓦が作られており、古くから開けた地域である。戦国時代は吹田城を巡り争いが多く、荒木村重の異母弟が吹田城主となって、村重とともに信長に反抗したため、1597年の有岡城の戦いまでは城が存在していたが、その後は消滅したようである。それ以来、この地は幕府領となり、最近まで農業（稲・クワイ・菜種・タケノコなど）が中心だった。丘陵部分が千里村で、丘陵の端は岸边村・垂水村・豊津村というように地形の特徴で村名がついている。6000年前頃は、淀川と猪名川が大阪湾に注ぎ込むあたりの南に突き出た半島部分が千里丘陵であった。現在の千里中央駅近くにある島熊山（吹田市・箕面市・池田市の境）が最高点で、ここから東南へ向かってなだらかに下り、JR東海道本線の付近で平野となる。千里丘陵は「洪積層」で「大阪層群」と呼ばれる厚い地層で、平野は「沖積層」で柔らかい粘土層である。（図7）

7 服部天神・住吉神社

吹田市にある古道には、18基の道標が確認されている。この石材でできている道標は全国的に江戸中期以降のものが多く、最古のものは池田市伏尾にあり、寛永10年（1670年）のものである。もっとも多いのが天保（1830）～明治（1912）にかけてのもので、町人や農村の経済力が向上し、社寺参詣などの個人旅が盛んになってきた頃である。石柱の形は角柱が多いが、常夜灯や五輪塔、自然石のものもある。これらは、旅人に行き先の便宜を図るだけでなく、造立する人がお金をだすことで神仏を供養することにつながっている。また、これに礼拝する人にも功德があると考え、追善供養のための塔婆と同じ考えで建立されている。^{vi}

服部天神から垂水神社まで吹田街道を歩いて、景観や形跡をたどりながら、街道が栄えていた時代を感じてみた。阪急宝塚線の服部天神駅を江坂町方面へ出て池田泉州銀行を右角にみる交差点に能勢街道が通っている。その交差点を左へ行くと服部天神があり、そこに説明文が立てられていた。（写真8）服部天神の境内に入ってみると能勢街道には裏口で接していたことがわかった。（写真9）

能勢街道は、大坂（現大阪府北区中津1丁目）から池田市を通り、能勢妙見寺へお参りを行うための街道であった。池田市の石橋で山崎通りと合流し、山陽道で太宰府まで、山崎通りから唐街道で京へつながっている。当時信仰の対象となっていた北摂の勝尾寺、龍安寺、服部天神、東光院、原田神社、多田神社などの古社寺に寄ることができた。さらに吹田街道を江坂方面へ進んでいくと、住吉神社・住吉稻荷神社がある。（写真10）ここも吹田街道からは裏側から入ることとなる。住吉神社は大阪市住吉区にある住吉大社の別宮として奈良時代以前に造立されたものである。吹田街道は千里丘陵から流れ出る河川と直交するような位置関係となっていて、丘陵か



（写真8）服部天神の立て札



（写真9）服部天神の境内



（写真10）住吉神社

らかつての大阪湾、その後は淀川や神崎川に向かって中小河川が流れ出ている。豊中市から吹田市江坂町のあたりは西から猪名川、天竺川、高川の各河川が自然堤防と後背湿地を形成している。かつての大坂湾へ鳥趾状の三角州を作り、後背湿地が堆積され自然堤防が高まり天井川もできている。住吉神社を過ぎて天竺川を越えると、各河川が流れ込んでいた地域が今も地名として、このあたりでは「浜」や「豊津」などに残っている。(写真 11) 吹田街道が天竺川を越えたあたりは「浜」という地名で、旧大阪湾か神崎川などへ流れ込む地域であったことが伺え、湿地を利用した水田が広がる地域であったことがわかる。



(写真 11) 電柱の表示「浜」

8 寄進地系荘園

12 世紀頃にこの付近の土地が奈良春日大社へ寄進されて寄進地系荘園となっている。(写真 12) 目代 (= 荘官) として今西家がこの地を管理していることから、朝廷へ徴税する国司の横暴よりも有力な春日大社へ寄進して不輸不入の権を獲得したことが想像できる。



(写真 12) 今西氏屋敷

今西屋敷から再び吹田街道へ戻り、豊中市立小曾根小学校に沿って歩くと古い道標とお地藏様の祠があった。道標に「左いけた みのを 中山」と記されており、左へ行くと吹田街道と交わり、池田から勝尾寺方面、箕面寺、中山寺へとつながる。

(写真 13) また、お地藏様は「天保 10 年亥年」と読めることから「1839 年」に建立されたものである。(写真 14) 1839 年は江戸時代後期で、幕府を批判した渡邊崋山や高野長英らの言論が弾圧された「蛮社の獄」がおこった年である。

また、この時代のお地藏様は仏教信仰の菩薩の一尊というだけでなく、旅人の安全や疫病が村に入り込まないために祀られる地元の神と習合した形であると思われる。道標に従って左へ行くと和菓子の「丹洛」の前を通り、吹田街道に戻る。吹田街道を進むと高川を天井に見ながら、(写真 15) 下をくぐると江坂町へ入る。



(写真 13) いけた みのを 中山



(写真 14) 地藏尊「天保 10 年」



(写真 15) 高川の流れ

9 勝尾寺への道

天井川の高川をくぐり、江坂町に入ってすぐの「神田マタニティクリニック」を左に曲がり、幹

線道路から一本北側の道がかつての吹田街道となる。左へ行くと服部緑地となる交差点に道標があった。(写真 16) この道標には「右かちをじ三里」とある。近くに解説が書かれた立木があった。そこには「馬頭観音像右かちをじ 彫りが深く大きくみごとな道標です。旧在所は高川堤防の三叉路に立っていた」と書かれているので、違うところからここへ移設されたものと思われる。勝尾寺まで三里とすると、一里が 3927.273m なので三里は約 11.78km となる。この道標が設置されている場所から勝尾寺までを地図上で現在の道路を使って計測すると 15.3km となることから、立木に説明があるとおり、もっと勝尾寺のある箕面に近い街道沿いにあったものと考えられる。



(写真 16) 馬頭観音右かちをじ

さらに、東へ進むと榎坂西道標と榎坂東道標があった。榎坂西道標は 2 基あり、その一つに「右 かちをじ」の刻字があり、右へ進むと高川を渡って三国街道を通り、勝尾寺街道へと続くようである。(写真 17) この道標の右に設置された道標は吹田街道の交通量が増えてきたためにくわしい表示が必要となって設置されたものらしい。この道標の刻字には「右みのお 中山」、「すぐ はっとり あま」、その横の面に「すぐ 吹田 京」となっている。この街道を通って行くことができる観光名所の箕面寺や西国三十三カ所観音霊場二十四番目札所の中山寺、大きな集落として、尼崎、吹田、京が示されている。



(写真 17) 榎坂西道標

この西道標を少し進むと榎坂東道標があり、吹田街道から大阪十八条町に通ずる古道の分岐点に立てられている。大阪市の十八条という地名は、西成郡の起点飛田(今の阿倍野)から古代の条里制で数えて十八番目にあったものと言われており^{vii}、「十三」という地名も同様の意味である。この道標から南へ行き、神崎川を「榎木の渡し」で渡ると大坂の十八条に通じる。現在は榎木橋がかかっている、吹田と大坂をつないでいる。この道標にも「左り勝尾寺」(写真 18)と書かれており、昭和 63 年まで道ばたで埋まっていたものを引き上げて、向きを古道と合うように 90° 回転させて整備したそうである。吹田市教育委員会による説明板があり、古道の様子が現代でもよく分かる。(写真 19)



(写真 18) 榎坂東道標

ここまで吹田街道をたどってみると、江戸時代には「勝尾寺」への参詣を目的とする旅人が多くいたことがよく分かった。吹田市教育委員会の説明によれば、勝尾寺は平安時代以来、朝廷の帰依と保護を得た大寺院で、観音信仰が盛んになると西国三十三カ所観音霊場の二十三番札所として広い信仰を集めていて、大阪方面から榎木の渡しを使って参詣する人が多かったとされている。

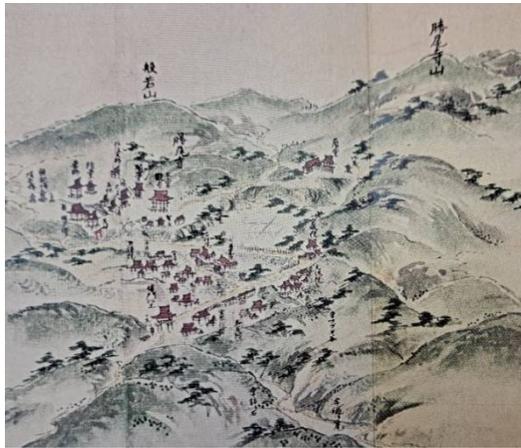


(写真 19) 吹田市教委説明板

勝尾寺は応頂山と号し、現在は高野山真言宗の寺である。宗派を越えた山岳仏教の霊場として、平安時代の後白河法皇の編による

「梁塵秘抄」にも聖の住みかと唱われており、法然もこの寺に来ていることが記録されている。ま

た、吹田街道の道標に案内がある中山寺も平安時代以来の観音信仰の霊場である。1573年からの荒木村重の乱で一時消失したが、1609年豊臣秀頼によって再建された。本堂の十一面観音立像は平安時代の快成（仏師）の作とされている。現在では、安産・求子の祈願所として信仰が篤く、広く一般に知られている。（図8）^{viii}



（左）勝尾寺

（図8）山崎通分間延絵図より viii

（右）中山寺

10. 古道を歩いてみて

今回、歩いた古道はとても小さな範囲でしかない。書店で販売している紙の二万五千分の一地形図で探すと1辺5cmの正方形に入ってしまう。そんな小さな範囲でありながら、「吹田」と「伊丹」という2つの図版にまたがってしまうという目立たない地点でもある。そのため、地理院地図などのWeb地図を使うことで、地域の概観や特色を探し出す作業が必要であった。

現在は梅田や新大阪にも近く、市街地化が進んで、なかなか元の地形が見えにくい地域であるが、地域を調査すると形跡やヒントが見え隠れする。それらを見つけ出して推測し、仮説を立て、それを証明する活動を行うことで探究的な学習が可能となると思われる。

この地域調査およびフィールドワークは、地理教育にも応用・実践できる内容へと発展できる可能性が見られる。この古道はここだけでなく、まだ先があり、他の街道や古道と連絡をしているので、もうしばらく辿ってみたいと考えている。

（おかつみ よしお）

ⁱ 2021 水野一晴 自然のしくみがわかる地理学入門 角川文庫

ⁱⁱ 竹内誠（監修） 日本の街道ハンドブック新版 三省堂

ⁱⁱⁱ 2012 中沢新一 大坂アースダイバー 講談社

<http://atamatote.blog119.fc2.com/blog-category-54.html>

^{iv} 地形図と「弥生時代後期～古墳時代前期（梶山/市原）」の古地理図を重ねたもの

^v 地震調査研究推進本部事務局「市原編 1993 大阪層群」

<https://www.hp1039.jishin.go.jp/danso/OsakaFu/figures/f1-2.gif>

^{vi} 加賀真砂子 吹田のおもな古みち 吹田市立教育研究所

^{vii} 大阪市ホームページ <https://www.city.osaka.lg.jp/yodogawa/page/0000000431.html>

^{viii} 児玉幸多（監修） 山崎通分間延絵図第1巻 東京美術

注) 文中写真はすべて筆者の撮影による。

アイヌ観光を題材とした授業実践と効果
—高等教育機関基礎科目の授業を事例として—

北翔大学 菊地 達夫

1 はじめに

2020年7月、北海道白老町にアイヌ文化復興拠点となる民族共生象徴空間（ウポポイ）を開設した。当初、同年4月の開設予定であったが、COVID-19のまん延により、約3か月遅れとなった。その後、コロナ禍であったものの、開業半年で約19万人の来場があり、満足度評価において約7割の方が「満足」との評価をした^{注1)}。よって、民族共生象徴空間（ウポポイ）は、一定の集客力をみせ、アイヌ民族・文化に関する情報発信機関の役割をしている。ウポポイとは、アイヌ語で（大勢で）歌うことを意味する。

他方、道内におけるアイヌ民族・文化に関する学習は、小中学校の社会科や総合的な学習の時間、旅行（遠足）・集団宿泊的行事の修学旅行の機会に限定される。学習資料の中心は、博物館資料である。博物館は、生涯学習施設であるものの、同時に観光的施設の性格も強い。

ところでアイヌ観光に関する先行研究・実践は、いくつかみられる。例えば、崔銀姫（2012）では、1950年の日本における「観光アイヌ」の誕生をめぐって全国的な流行と社会的なブームに至るまでの歴史を、近代後半からおおよそ60年間（1899年の「北海道旧土人保護法の制定」～1959年の『コタンの人たち』）の時代における「観光アイヌ」とは何かの問題を中心に、単なる「差別」と「同化」の問題に帰結させるのではなく、20世紀初期から半ばのメディアの空間の成立と変容をメディア文化論の視点から鳥瞰的に検討することで、「覽せる／観られる」といった身体を媒体にした経験のなかに隠れていた歴史社会的意味とその変容を考察した。

考察の結果、第1期の時代（1899年～1926年）において、アイヌにとってはそうした博覧会の主催者たちの欲望への理解には至らず、「観れる」アイヌの身体の方角性は異なったものであった。その後、第2期の時代（1927年～1945年）になるとアイヌの大きな変化としては、「民族意識の高揚」とアイヌ自らが各種の著作物を出版したことであった。その後、第3期（1946年～1959年）の戦争が終わってから1959年までの特徴は、「観光の介入」による変化があった。「観光アイヌ」とは、さまざまなファクターが相まった60年間のなかで「観られる」アイヌとして風景化されていたことを明らかとした。

アイヌ観光の全盛期は、1950年代から1960年代にかけてであった。一方、アイヌ観光の研究は、1990年代以降であり、文化人類学や社会学を中心に展開し、蓄積はまだまだ少ない。また、アイヌ観光を題材とした授業研究（高等教育機関）に限れば、ほとんどない。

そこで小稿は、アイヌ観光を題材とした高等教育機関基礎科目（看護師養成課程の文化人類学）の授業開発を行い、どのような学習理解をしたのか検証し、その効果と課題を明らかとする。

なお、授業研究資料は、2022年度1学年の受講者（40名）によるものである。

2 アイヌ観光の流れ

本章では、崔銀姫（2012）ほかを手がかりに、アイヌ観光の流れ（図1）を確認しておきたい。アイヌ観光の過程は、戦前の芽生え期、戦後の観光の介入期、変容期の3段階に分けることができる。

戦前の芽生え期では、「観られる観光」を主体とし、マスメディアを通じて民族意識の高揚につながった。そのきっかけは、開拓事業の視察を目的とした明治天皇の来訪（白老町）である。結果、白老町は、アイヌ民族居住地として認知度が向上した。

戦後に入ると、大阪ほかより、旅行視察団の来訪が相次いだ。多様なマスメディアが情報発信を行い、観光客の増加（観光ブーム）となった。1960年代には、ポロトコタン入口に50以上の観光土産店が立地した。アイヌ観光は、見世物的な意味合いが強く、アイヌ民族・文化に誤解を与えかねない状況にあった。このような危機感は、アイヌ民族において広がり、アイヌ観光の在り方に大きな変化が生じた。1976年、白老観光コンサルタント(株)を発展的に解散し、(財)白老民族文化伝承保存財団（後に(財)アイヌ民族博物館に改称）を立ち上げ、1984年にアイヌ文化の専門博物館を立地させた。アイヌ民族博物館はアイヌ自身が運営・調査研究を行い、館内職員も7割近くがアイヌで、自身の歴史や文化、言語を働きながら学ぶことのできる民族教育の場の役割も担った。

阿寒湖温泉地域では、2000年以降、観光まちづくりの一体化を和人とアイヌ民族の参加で行い、アイヌ文化色の向上（郷土力）を目指した。例えば、阿寒観光協会の副理事長や各種行事の代表挨拶にアイヌコタンの組合長が担い、重要な役割を果たしている。

バブル経済崩壊後、アイヌ文化施設への入り込み数は減少に転じ、その後も低迷した。2012年、アイヌ民族博物館を改築して国立化を含む民族共生象徴空間（ウポポイ）の構想の検討が始まった。その後、2019年のアイヌ施策推進法（アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律）において「先住民族」であることを明記し、共生社会を目指す改訂につながった。同時に、日本政府は、2020年（2021年）の東京夏季五輪の開催において、国内外にアイヌ文化を情報発信できる重要な機会と位置付けていた。

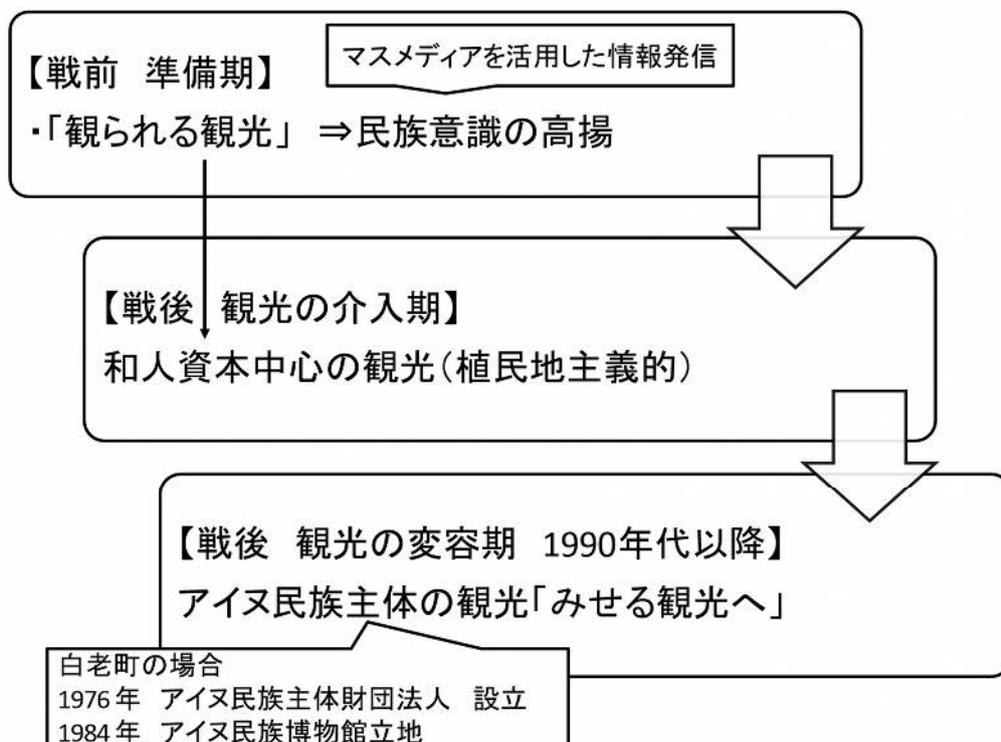


図1 アイヌ観光（北海道／白老・阿寒湖温泉・平取）の変化

3 授業実践の内容

(1) 高等学校地理歴史科「地理総合」との関係性

2022年4月より、高等学校地理歴史科では、地理総合、歴史総合の必修科目が開始となった。本授業実践の受講者（2022年度入学生）は、基本、選択必修科目の地理A・Bの教育課程であった。日本史A・Bを履修した場合、地理を履修していない可能性が高い。そこで、本節では、地理総合の履修者（2025年4月入学生以降）を見据え、学習内容とアイヌ民族・文化との関係性に触れておきたい。今後、高等学校卒業後、地理総合の学習内容を高等教育機関の基礎（教養）科目（地理学または関連科目）において、どのように活かすことができるか、重要となってくるだろう。

地理総合は、A 地図や地理情報システムで捉える現代世界、B 国際理解と国際協力、C 持続可能な地域づくりと私たちの3つの学習内容（単元）からなる。そのうち、B 国際理解と国際協力の

(1) 生活文化の多様性と国際理解では、世界における地形、気候、言語・宗教、歴史的背景、産業と人々との生活を学習する。具体的には、世界各地の気候や地形が、人間生活へどのような影響や関連性を与えているのか、考察する。その結果、住居形態、地域農業、地域観光の成立や特色を理解する。

同じような視点で、アイヌ民族・文化をみれば、以下のような内容に関連する。北海道アイヌ語地名では、「別」や「内」は3分の1を占める。アイヌ語地名は、地形の様子を表したものが多。「別」（例：江別）は、一般的に大きい川を、「内」（例：静内）は小さい川を表すとされている。アイヌ民族は、川の役割を①大切な食糧である魚を獲る場所、②船による山（動物狩猟・山菜採集）・海（海産物確保）への移動手段とし、重視していたと考えられる。

以上から、地理学習（地理総合ほか）における地理的な見方・考え方では、自然環境の影響をどのように人間生活へ活かしてきたか見極める。そのような視点で考えると、アイヌ民族・文化（観光）の内容を深く理解する上で、地理的な見方・考え方が役立つものと考えられる。

(2) 授業全体の位置付け

本節では、基礎科目「文化人類学」の授業全体の構造とアイヌ観光授業の位置付けを確認する（図2）。学習内容は、第1段階の文化人類学の概要・調査方法、第2段階の中核的内容、第3段階のアイヌ民族・文化の内容とすすみ、最後に振り返り（内容の確認）を行う。第1段階では、文化人類学の学問誕生の背景や特色、学問成果を得る調査・観察方法を取り上げる。第2段階では、文化人類学の基本分野となる環境、地域社会（コミュニティ）、社会組織（国家）、通過儀礼、健康を取り上げる。第3段階では、地域の具体としてアイヌ民族・文化に着目し、世界観、言語・地名、同化政策の影響、アイヌ観光を取り上げる。それらは、伝統文化や道内地名を題材としながらアイヌ文化の特色に触れ、日本政府による同化政策により、民族の誇りを奪われ、差別や偏見を生み出したことを理解させるようにした。さらに、伝統文化の一部を観光資源に活用された過程と課題の認識を深めさせた。関連として、観光と植民地主義の関係をインドネシアのバリ島を事例とし、政策の影響により、伝統文化の保護を理由として上手に観光利用された類似性を示した。

アイヌ観光の授業（第13・14回）は、道内地域で、どのような経緯で始まり、どのような過程を辿り、どのような課題・変化があるのか、文書資料を用いながら理解を深めようとしたものであ

る。その詳細は次節で述べる。

道内の場合、アイヌ民族・文化に関する内容は、小学校、中学校、高等学校の社会系教科や見学（修学）旅行で学習機会がある。北海道教育庁の場合、小学校における総合的な学習の時間の学習例を提示している^{注2)}。他方、学習の機会は、各学校、教科担当者の判断によるところがあり、その差異は大きい。結果、高等学校終了時点では、アイヌ民族・文化に関する認識は十分とは言えない。

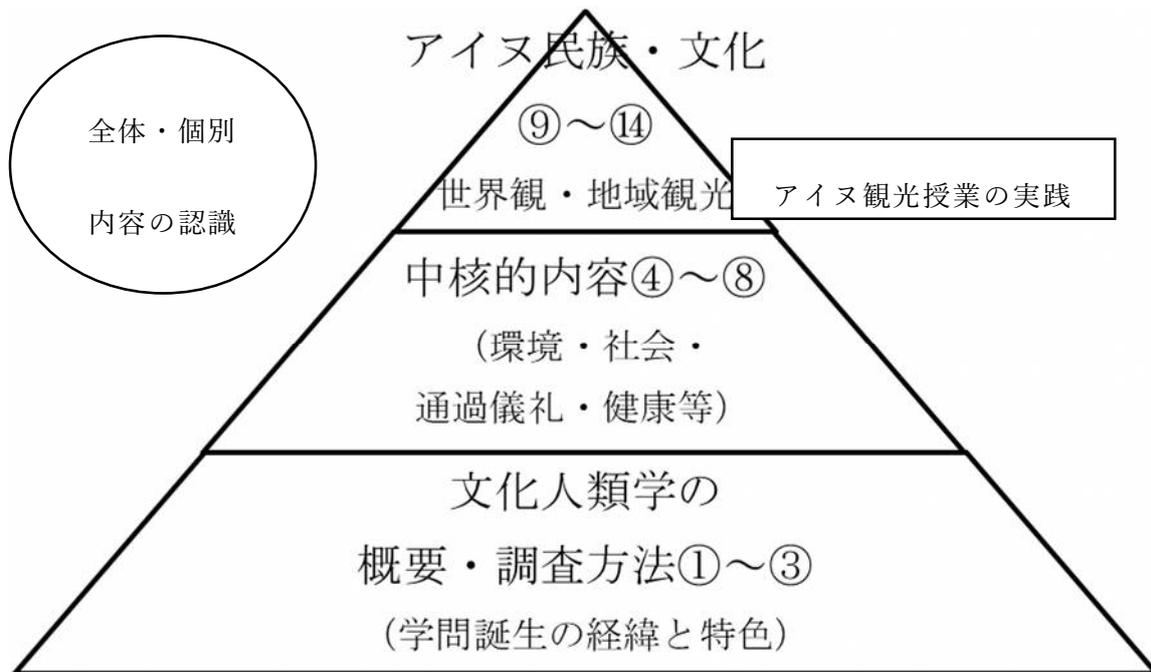


図2 文化人類学（2022年度）における授業全体構造（全15回）

注）丸数字は授業回数をあらわす。

（3）開発授業の内容

アイヌ観光に関する授業は、2コマ（90分×2）で行った（表1）。到達目標は、「アイヌ観光の変遷と課題・改善の方向性について理解できる」とした。1時間目（第13回授業）では、まず、アイヌ観光のイメージを思考（7分間）させ、その上で情報共有（5分間）を行った。続いて、アイヌ観光に関する文書資料を読ませ（10分間）、アイヌ観光事例（白老や阿寒湖温泉）やアイヌ観光の課題をまとめさせた（13分間）。文書資料は、「アイヌ文化で広がる北海道の観光～多文化共生で魅力あふれる北海道へ～」開発こうほう2012年11月号の一部抜粋を用いた。具体的には、民族共生の象徴となる空間の構想の具体化（2012年7月）を受け、宿泊施設、旅行代理店、広告代理店、国土交通省、アイヌ民族博物館の関係者により、これまでのアイヌ文化の振興に向けた取り組みを検証し、新たなアイヌ文化の創造及び発展等につながる地域振興や観光振興の視点から議論した様子（座談会）を記録したものである。

2時間目（第14回授業）では、アイヌ観光の変化、アイヌ観光事例（白老）、アイヌ施策推進法の特色と民族共生象徴空間（ウポポイ）、アイヌ施策推進法の課題、アイヌ観光事例2（阿寒湖温泉）、アイヌ観光の課題と工夫改善、アイヌ観光の今後の方向性について説明した。これらの内容

は、前の授業で使用した文書資料をもとに確認解説したものである。最後に、2 コマを通じてわかったことをワークシートに書かせた（10 分間）。

表1 アイヌ観光を題材とした授業構造（概要）

【本時の目標】

アイヌ観光の変遷、課題、改善の方向性について理解できる（知識）。

【授業展開】

1 時間目（90 分）第 13 回	主な学習内容・活動
導入 15 分	□前時の学習内容の確認（ワークシートの返却・講評） □本時の到達目標（知識）・学習内容の提示
展開 70 分	○アイヌ観光のイメージの思考（ワークシートの配付） ●イメージ内容の情報共有 ○アイヌ観光の文章資料の黙読 ○文章資料からの読み取り （アイヌ観光事例／白老・阿寒湖温泉、アイヌ観光の課題）
終末 5 分	□学習内容の確認・予告
2 時間目（90 分）第 14 回	主な学習内容
導入 5 分	□本時の学習内容の提示
展開 70 分	◎アイヌ観光の確認解説（スライド資料） *一部、スライド内容の転記作業を含む
終末 15 分	○アイヌ観光の授業でわかったことの記入（ワークシートの回収）

○指示 ●意見交換 □説明 ◎解説

*授業文書資料

「アイヌ文化で広がる北海道の観光～多文化共生で魅力あふれる北海道へ～」

開発こうほう 2012 年 11 月号、8 頁～12 頁。

【本時の評価】

アイヌ観光の変遷、課題、改善の方向性について重点を示すことができたか（知識）。

4 開発授業の効果

開発授業の効果は、第 15 回授業のまとめ・振り返りワークシートを手がかりとして、明らかとする。ワークシートでは、1 授業内容に関するキーワード記入、2 授業全体を俯瞰して改めてわかったこと、3 授業内容と看護師養成の結び付き、関係性について振り返りをさせた。中でも、1 では、第 1 回（初回）と第 15 回（終回）を除く各回の授業内容について、重要と思う上位 3 つのキーワードを授業ノートや配付資料をもとに書かせたものである。アイヌ観光の場合、第 13 回と第 14 回授業を 1 つとして記入させた。

表2は、アイヌ観光（第13・14回授業）における上位キーワードで表出した内容である。キーワード1位（4語）では、「みせる観光」8人、「観られる観光からみせる観光へ」4人、「アイヌ観光」「アイヌ文化」3人であった。キーワード2位（6語）では、「アイヌ新法」「観られる観光」3人、「共生社会」「正しい意味・価値」「みせる観光」「国の責任」2人であった。キーワード3位で（6語）は、「国の責任」3人、「白老」「白老・阿寒」「みせる観光」「教育支援」「正しい意味・価値」2人であった。

最も多い語句（12人）は、「みせる観光」であり、キーワード1位～3位すべてにおいて表出している。さらに、「観られる観光からみせる観光」を含めば16人に達する。

すでに述べたように、授業の到達目標は、アイヌ観光の変遷、課題、改善の方向性を理解するものであった。「みせる観光」は、アイヌ観光の見世物的な在り方から脱却を目指す象徴的な語句である。また、「みせる観光」（キーワード1位）、「観られる観光」「アイヌ新法」（キーワード2位）、「国の責任」（キーワード3位）といった各段階1位（☆の印の語句）をみれば、一連の学習過程を示すものと判断できる。具体的には、「国の責任」はアイヌ観光の課題の背景にあり、「観られる観光」はアイヌ観光の課題で、「みせる観光」は改善を目指す取り組みであり、「アイヌ新法」はその成果の一部変化として実現したものである。

以上から、受講者は、アイヌ観光について学習理解できたものと判断できる。

表2 アイヌ観光（第13・14回授業）における上位キーワードで表出した内容

キーワード1位	キーワード2位	キーワード3位
☆みせる観光 8人	☆アイヌ新法 3人	☆国の責任 3人
観られる観光からみせる観光へ 4人	☆観られる観光 3人	白老 2人
アイヌ観光 3人	共生社会 2人	白老・阿寒 2人
アイヌ文化 3人	正しい意味・価値 2人	みせる観光 2人
	みせる観光 2人	教育支援 2人
	国の責任 2人	正しい意味・価値 2人

資料) まとめ・振り返りワークシートより。

注) 意味が同意であれば、表記が異なっても、含めていることがある。

5 おわりに

小稿は、アイヌ観光を題材とした高等教育機関基礎科目（看護師養成課程の文化人類学）において授業開発を行い、どのような学習理解をしたのか検証し、その効果と課題を明らかとするものであった。

具体的には、まず、道内アイヌ観光の流れとして、観光誕生の背景、観光ブームの実態や課題、課題解決に向けた動向を確認した。アイヌ観光は、道内においても地域博物館を中心とした拠点的な域は出ず、依然その広がりには課題がある。次に、高等学校地理歴史科地理総合では、生活文化の多様性の学習内容において、自然環境がどのように人間生活へ影響を与え、地域的特色を形成しているのか学習する。このような地理的な見方・考え方は、アイヌ民族・文化（観光）の学習におい

て応用できることを強調した。ゆえに、高等教育機関の基礎（教養）科目として、アイヌ民族・文化（観光）を取り上げる重要性につながろう。続いて、アイヌ観光の授業は、全15回の授業全体において地域の少数民族の具体と応用的側面があることを示し、授業実践の目標・展開・評価を述べた。最後に、授業内容の重要キーワードの表出結果を手がかりに、授業効果（学習理解）を検証した。その結果、最も多い表出語句の「みせる観光」は、授業内容の重点を示すものであり、学習理解できたものと解釈した。

これらの授業効果は、以下のような授業開発の意図によって有用性が生じたものと考えられる。アイヌ観光の理解を目指すにあたり、授業目標として、空間軸を北海道、時間軸を観光活動の変容に着目させた。また学習活動は、まず、アイヌ観光のイメージの予想を行い、その結果を情報共有させた。次に、文書資料を用いてアイヌ観光の実態と課題を把握させ、スライド資料による確認解説を行い、最後に授業内容の重点を書かせた。これらは、学習課題の提示、資料活用、学習課題の確認や振り返りを行う地理的学習に類似させたものである。よって、学習理解は、地理的学習の有用性が実を結んだものである。

ただ、今回の授業実践では、「みせる観光」について、どのような活動を指すのか、どのような意味があるのか、その具体的な認識まで達していない。今後、「みせる観光」の観察・体験につなげることができれば、その改善の方向性をより実感できるであろう。

注

- 1) 北海道新聞記事 2021年1月12日 22頁参照。
- 2) 北海道教育庁学校教育局義務教育課作成資料。

文 献

- 内田順子（2015）：アイヌ文化の伝承のありかたと観光、国立歴史民俗博物館研究報告第193集、pp. 75-94.
- 北原モコットゥナシ・岡田真弓（2022）：アイヌ民族と文化交流としての観光の新展開に向けて、CATS 叢書第16号、北海道大学観光学高等研究センター、pp. 39-66.
- 須永博（2016）：先住民観光と博物館—二風谷アイヌ文化博物館の事例から—、立教大学観光学部紀要第18号、pp. 78-89.
- 崔銀姫（2012）：「観光アイヌ」とは何か—まなざしの歴史的な変容をめぐって—、社会情報学第1巻2号、pp. 93-108.